

## 荒城の月

春には桜が咲き誇る城山の道では、晩夏の今、陽が緑葉の層を通し木漏れ日となって降り注いでいた。康次郎は、涼しげな場所を選んで石垣に腰を下ろし、幼なじみの充男が来るのを待っていた。あと一週間もすれば夏休みが終り、康次郎は東京の音楽学校に戻るようになっていた。九月には、新学期の授業が始まるのであったが、彼にとってはそのことよりも、ドイツ留学をどうするか、校長に返事をしなければならぬことのほうが、大きく心の内を占めていた。

高塚康次郎は、幼いうちから歌を好み、家族の唱う歌はもとより、物売りの歌、芸人が門口で唄う歌も瞬く間に覚えてしまい、そのうちに自分で勝手に歌を作り始めました。尋常小学校の校長もその才能を認め、それを伸ばすようにと、音楽の先生が彼の担任になるよう組分けをしてくれた。

音楽の先生、森鞠子は、地元のS師範で音楽を専攻したので、歌唱の他に、作曲法の基礎も身につけていた。康次郎は、はじめは自己流で曲を作っていたのだが、森先生の教えてくれる作曲の方法を覚えては、新しい歌を作るようになっていた。そのうちのふたつみつは、森先生が歌詞をつけて、尋常小学校の生徒達も唱うようになっていた。後に康次郎は、音楽学校の創作演習として、それらをもとに児童向けの唱歌を正式に作曲することになるのであった。

作詞の力は、彼はまったく並みにしか持って生まれてこなか

った。ところが良くしたもので、彼とおない歳の山下充男は詩を得意としていて、彼らがそろってS中学に進学してからは、高塚作曲、山下作詞の歌を作るようになっていた。中学校では音楽は軟弱だとかの理由で授業にはなかったのであるが、ふたりは、中学卒業の頃には、学校の中よりも市内でちょっとした有名人になっていた。それは、市内の城山の下にS中学校と並んで立つS尋常小学校の校歌に、彼らが応募して見事に採用されたからであった。康次郎による曲は、城山の一日の雰囲気の変化を緩急徐のリズムで描き、それでいて親しみやすいメロディーにまとめられていた。詩は、まさに城山の四季を一番から四番までにうまく割り当てて覚えやすくまとめていた。充男の詩が先にでき、それに康次郎が曲をつけたのであった。彼らは、要するに年中遊び回っていて身に浸みついていた城山の朝夕四季をそれぞれ得意技で表現したに過ぎなかった。

S中学を卒業すると、康次郎は、東京の音楽学校に入るべく、在京の親戚を頼って音楽学校予備塾に入った。充男は、地元に残って師範学校に通った。充男は、詩作の能力を生かして国語の先生になると誰もが思いきや、予想に反して歴史の先生になる道を選んだ。彼は、仕事として歴史の先生をしたいと歴史を専攻することにし、それが正解とでもいうように、彼は、師範学校に入って最初の夏休みに、江戸時代における城山周辺の町人生活の変遷を調べた報告書を提出し、傑出した出来だということ褒賞を得ていた。詩作は、継続していた。

その後、彼らはそれぞれの道に励み、康次郎は音楽学校に難

なく合格し本科を修了し、昨秋からは研究科に通い始めていた。充男は、地元の出身中学で歴史の見習い教師となっていた。

この夏休みに入って、彼らは何回となくこの城山で、あるいは互いの家で、時には泊まりに行ったりしてそれぞれの近況、関心事、人生論、文明論などを語り合った。今日も、どちらがいうでもなく城山にのぼってみようということになった。昼飯をすませ、城の一の門の上、桜の大木の辺りで落ち合うことになったのである。

「おーいっ、待たせたか？」と充男の声が石段の下から聞こえ、袴の裾をひらめかせて走ってくる姿が現れた。

「ゆっくり来てもいいのに、そんなに急いで、どこへ行く、はっはっは」と康次郎が笑った。充男は少し離れた大石に座って腰から取った手ぬぐいで汗を拭いていった。

「おまえ、いつ東京へ戻るんだ？」

「まだ、はっきりや、決めてない」

「そうか、でも東京へもどれば、ドイツ行きの結論を出さなきゃいかんのだろ？」

「うん」

康次郎が、そのことに迷いがあることを、充男はよく分かっていた。そのもとが半分以上、自分にあることも。

「康次郎、お前は、これからの日本の音楽界を背負ってゆくことになるんだから、自分の好みや回りの意見だけで考えるんじゃない。日本の将来方向を考えた上で、その中に自分をどう

置くことが出来るか、それを考えにやいかんぞ。」

「そりゃ、分つとる。何回も同じことを言うな」

実はそこが康次郎にはよく分らないのであった。城山の日  
の光は高い角度から降り注ぎ、木漏れ日は康次郎の頭を照らし、  
影を足もとに落としていた。

「しかし、ドイツ留学のイメージがはっきり出来上がってるわ  
けじゃないだろ。漠然と行ったって国費のむだづかいだぞ。俺  
は、お前が日本の歴史をよく考えてみることを薦めるよ」

「日本の歴史？」

「おう、そうだ。日本の文化が、古代からどのように出来上が  
ってきたか。それを考えたことがあるか」

「うーん、そういわれると困るけどなあ」

「俺は、最近分かったんだが、日本の文化は、絵でも文字でも  
大陸からのものを取り入れて、それをうまく日本化してきた流  
れが太くある。だから、聖徳太子でも、空海でも、先般幕末の  
洋学者でも、外国のものをありがたがってきた。そして、それ  
を上手く日本化した経過、それをあまり考えずに過ごしてきた。

実際は、そこに大事なことがあるはずなのにな」

「日本化した経過って、一体何じゃ？」

「それは、きつと、日本の風土と民衆の生活にあるんじゃない  
か、と俺は思うんだ。民衆って時、それは貴族たちの役割も含  
めてだが、少なくとも国家権力などとは別のところでじゃない  
かと」

「お前の話は、いつもむずかしいな」

康次郎は、大石に座ったまま後ろにのけぞって、支える両腕を突っ張って桜の樹冠を見上げた。桜の木では、アブラゼミやクマゼミが賑やかに鳴いていた。

「むずかしかあない。まず文字のことを考えてみる。日本の無文字社会に漢字が入ってきて使われ始める。ところが、表意文字の漢字だけでは、どうも日本語は表しにくい。そこで漢字を表音文字に直した。それで書かれたのが日本書紀であり、古事記なのだ。万葉仮名なんぞもある。かなの誕生と確立の過程だ。漢字とかなで日本語を表す文字の基本ができた」

「なるほど」

康次郎は、上を向いたまままで相づちを打った。充男は、康次郎はセミの合唱を聴いているみたいで、自分の言うことを理解できていないと一瞬思ったが、話を続けた。

「それで、その仕事を誰がやったと思う？」

「学者か」

「そう思うだろう。もちろん学者というか、宮廷の知識人もやったが、女だ、兵士だ、地方役人だ。万葉集をみる、そんな人たちの歌集だろう。歌いたくてたまらない人々、それを書き付きたい、歌人（うたびと）の間で知り知らせ交換をしたい、そういう人々の需要があって、みんなが使い込む中で万葉仮名が生まれた」

「そうか、音楽の場合も、山下理論が成り立つかも知れないなあ」

「そうなんだ。音楽は、どうなる？教えてくれ」

「そうか、そういえば心当たりがある。音楽学校ではな、日本音楽の歴史は、江沢校長が教えてるんだがね、これが結構面白い。そのなかで、こんなことが言われていた。つまり、歴史に残っている音楽は、どうしても雅楽など、宮廷や貴族社会で使われてきたものが多い。それはそれでたしかに日本の音楽を作ってきたのだけれどな、江沢先生が力をこめて話してくれたのは、今、文明開化で、西洋の歌舞音曲が広く民衆の間で広まっているように、どの時代にも、民の歌が広まっていたはずだ。しかし、悲しいかな、その圧倒的に多くは伝わってこなかった。今となっては発掘は不可能である。しかし、それがあったことは間違いない。それをどう『思い出す』ことができるか、それが大問題だ、と」

「うん、おもしろい」充男は、手ぬぐいを八捲きに播いて石の上にあぐらをかき直して、

「で、その問題の答はどうなんだ」

「江沢先生の話では、回答は全くでていない、ということだったなあ」

「俺は、きっとその答のいちぐちが、どこかの蔵の中にでも眠ってると思うがな」

「蔵の中？」

「そうだ。かつて流行った『えじゃないか』や『オツペケペ』などにみられるような広範な民(たみ)百姓の歌の記録が文字か何んかの形でそのうちに発見されるんじゃないか。そうしたら素晴らしいだろうな」

「そうか、曲は記録がないかも知れないが、詩は残る。それに基づいた歌を、何かを手掛かりに『思い出す』、つまり民の歌が復元されるかもしれない、ってわけだ。うん、やってみたい気がする。民謡は、今と昔をつなぐいとぐちを与えてくれるかも知れないぞ」

ふたりは、セミの声と木漏れ日が降り注ぐ城山の石垣で、古（いにしえ）の民が歌う姿をそれぞれ勝手に思い描きながら、暑さを忘れしばし思いにふけていた。と、女の澄んだ声が響いた。

「康ちゃん、あんた、まだ東京へ行ってなかったのね」

高良マツが、石垣の陰からのぼってきて彼らを見つけたのだった。

「マツねえさん、こんなところへなぜ？」

「子どもたちを城山に連れてきたのよ。今に、みんな上がってくるから」

確かに、下の方から子どもたちの甲高い歌声が聞こえてきた。

「鳩ぼっぼ、鳩ぼっぼ、ポッポポッポと飛んでこい・・・」

その歌声とともに、石垣の陰から小さな姿がたくさん現れた。マツは、康次郎の従姉なのだが、女学校を出て間もなく高良家に嫁いでいた。彼女の夫、高良了安は、この街ではちよつとした規模の寺、東福寺の住職だった。城山の東麓にある寺の一郭で、尋常科の子どもたちの帰宅後の託児所のようなことをやっていた、町屋の評判になっていた。評判のおもな理由は、マツが子どもたちを上手く扱ってくれるからであった。その子ども

たちを連れてきたのであった。

「さあ、あんたたち、ここは涼しいから、この辺りで一服。石垣の中から出ちゃだめよ。わかった？」

「はぁーい」と子どもたちはセミの抜け殻を見つけたりして遊び始めた。

「康ちゃん、ドイツって良いところでしょうね」

「と思うけど、俺、行くと決まったわけじゃないんだぜ」

「あら、校長先生のご推薦があれば決まったようなもんじゃない。きばって行ってらっしゃいよ。そしたら音楽学校の教授様ってわけね。すごいすごい」子どもたちに目を配りながらマツは笑いかけた。

「マツねえさんたら、気が早いよ」

「じゃ、私たち、上に行くからね。東京に行く前には声かけてね」

「勿論。じゃあね」

一行は、マツの音頭で行進曲風の軍歌を唱って登っていった。

「煙も見えず、雲もなく、風も起こらず、浪立たず・・・」

「元気な小母さんだなぁ」と、マツがいる間は黙っていた充男が言った。

「俺をドイツにやろうってんで、いつも煽るんだよ」

「もしドイツに行ったら、お前は何を勉強することになってんだ？」

「まだ、正式に聞かされた訳じゃないけど、欧州音楽史と作曲法が中心らしい。そういう名目の辞令が出るらしい」



「結構じゃないか。でもなあ、本当は、俺は、お前にはドイツに行く前にやるべきことがあるんじゃないか、と思うんだ」

「なんだそれは？」

「ひとくちでいえば、日本音楽史と日本音楽の成立ちの研究だ。さっき言ったような民の歌を掘り起こす序論みたいなものだ。研究科で、その課題を明確にして、それからドイツでもイタリヤでも行けばいい、と俺は思う」

「おいおい、行くのは俺だぞ、それはお前の研究課題じゃないのか」

「いや、違う、お前のだ。お前は、江沢さんの後か何かしらんが、音楽学校の先生になって、これからの日本の音楽を背負って行くことになるんだろ？」

「学校では、よくそんな風にいわれる」

「そうだろう。であれば、お前が何を身につけ思想として持ってドイツに行くかは、日本の音楽の将来に係わる。だから、俺は、そのため今、お前が為すべきこととして、日本の音楽の歴史とその中身、特に何が分からんかをはっきりさせろ、と云ってるんだ。音楽も文明もうんと発達している欧州で、その糸口を見つけてこい」

「理屈では、お前の言い分には一理ある。しかし、今、ドイツの音楽界は世界の最先端を走っている。バロックから古典派、浪漫派、どれをとってもドイツはずば抜けて一流ですっと来た。それそのものを体験せずして、日本の音楽のこれからはないだろう。お前は歴史に詳しいだろうが、音楽は俺のほうが詳しい」

「それ、それが危うい。ドイツの音楽なんて、お前なら、ドイツで生活すればひとりでに分かつてくるに違いない。で、音楽であれ、何であれ、今、主流派なのは遅かれ早かれ、いや、明日にでも落ちぶれて後進になるしかない。今の少数派の中から明日の多数派が育つ。明日の少数派を選ぶか、明日の多数派に掛けるか。俺たち、若いもんは、明日の多数派に掛ける使命を受けて生まれてきたんじゃないのか」

「うーん、俺も少し考えてみるよ。お前がいうことだからな」  
康次郎は、充男の迫力に押されて少し気弱になりかかっていた。しかし、それには予感のような別の理由があることに誰も気がついていなかった。ふたりは同時に尻をはたいて立ち上がった。

康次郎は、家の肘掛け窓に頬杖をついて城山の端にのぼりはじめた月を眺めながら物思いにふけていた。

「音楽学校の基本方針は、文明開化のもとで急速に進む西洋文化の移入を万能とするのではなく、日本に長く培われてきた雅俗両面の音楽の伝統をも大切にしてい、そこに西洋の理論や実際を見習って新しい日本音楽とその担い手を育てて行こう、というものだ。俺は、それは理に適ったものだと思う。それをしっかりと咀嚼して自分のものとした上で頭にたたき込んでドイツに行けば、西洋かぶれになどならないで帰ってこられるのではないか。充男は、そこるところを危ないという」

康次郎は、邦楽を専攻していた先輩が、欧米視察から帰って

きた時に講演した内容を思い出していた。

「欧州音楽と邦楽との間には雲泥の差があり、邦楽にこだわっていたら世界の現代文明に取り残されてしまう。これからは欧州の各時代の音楽を当音楽学校でも大幅に取り入れるべし」と力説していた。同僚の中には、それに批判的意見をいう者もいたが、当時としては稀有の経験談ということで、その主張はじわりと学校中に広がっていった。

「しかし、充男のいうことは俺の心に響くんだよな。日本人は、長い間、日本の風土の中で何十、何百の世代にわたって暮らしてきた。その中で、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、一年の暮らしや行事の中で音楽を生み出し育ててきた。それらはまさに日本人の歌だ。たとえば外国から音楽を導入したとしても、それがわが国の風土や歴史にいかにも同化吸収するかが解決されなければ人々に愛されっこないだろう。『才女』と名付けられた唱歌は、アニーローリーというスコットランド民謡の曲を借用し、それに別途、歌詞をつけたものだが、あの歌詞は、抑揚も強弱も曲に合っていない。そういうえば、誰かがあくびみたいだといっていたっけ。あれではいけない。俺は、今、ドイツに行つてこの解決の道を見つけ出せるだろうか」

康次郎は、充男の出した問題を解く自信が持てなかった。研究科でこころの準備をしてから行くのが良いのかも知れないという思いも頭の中では強いのであった。

この城山は、今は廃藩置県の影響もあって再興もできず石垣しか残らないが、城がつくられた十五世紀以来の政へまつりご

と)の変転、兵(つわもの)どもの栄枯盛衰など派手な歴史だけでなく、城下で城を支えた町人やその外側で衣食住を生産していた百姓の生き様も見守ってきたに違いない。音楽は、すべての歴史の中で生きてきた。それは現代も、未来も同じことである。その中で西洋の素晴らしい音楽の要諦を生かすということは、どうすれば出来るのだろうか。歴史の教師をやっている充男は、その方向だけはしっかりと見ている。俺が、国の命を受けてドイツに留学するとすれば、その時の課題は、確かに充男の言うとおりかも知れない。

そんな風に康次郎の考えは充男の投げ掛けた問題のまわりで堂々めぐりをしてとどまるところを知らなかった。満月が近いこの夜の月は、すでにかなり高くまでのぼり黄色みが消え青みがかってきていた。風もでてきていて、康次郎は少し寒気をさえ感じていた。

東京へ帰るのが明後日に迫った日の午後、康次郎はなにがしかの身のまわり品を買い込んでいつもするように東福寺の境内を抜け、家までの近道を取った。庫裡のほうから子どもたちの遊ぶ声が聞こえ、その中にマツの声も混じっていた。庫裡に近づいていった。マツの声が大きく響いてきた。

「さあ、もうすぐ夕方だから、これでもって帰る子は上っ張りやなんか、持ち物を忘れないように。来たときのことをしっかり思い出して忘れ物のないように」

「はぁーい」

子どもたちが正面の入り口に駆け寄った。

「忘れ物はないか？草履を間違えないように。残る子はどれ？」

三人が奥の方で手を挙げています。その子どもたちに待機を命じて、マツは庫裡から下りてきた。

「あら、康ちゃん、ちょっと待っててね」

マツは、山門の先まで子どもたちを送ってゆくと、迎えに来たそれぞれの女中や丁稚に子どもたちを託した。このように子どもを預けられる家は、女中や丁稚がいるような階層の家であった。

「康ちゃん、明後日、行っちゃうんだねえ。でもさあ、今度は東京に行っちゃうというより、ドイツに行っちゃうって気がするよ。ドイツに発つのはいつなのさ」

「マツ姉さん、まだ決まったわけじゃないよ」

「何いってんのよ。チャンスの神は前髪しかないのよ。前を通り過ぎて行っちゃったら絶対に捕まえられっこないんだから。東京へ帰ったら、真っ先に先生に『ドイツに行かせてください』って言わなきゃダメよ」

「うん、分かったよ」気が進まないかのような答をした。

城山の登り口に面して萬世閣という料理屋があった。この日、康次郎の東京行きを明日に控え壮行の宴が先ほどから開かれていた。康次郎の両親は、少し前に挨拶をして退席していた。康次郎と充男達のS中学の恩師、福山不二丸も参加していた。彼

は、現代でいえば物理学と哲学を合わせたような窮理学を教え  
ていたが、東京高等師範を卒業してドイツに留学した経験を持  
っていた。尋常小学校時代の音楽の先生、森鞠子は隣町から人  
力車で駆けつけていた。

満月がしばらく前に東天に上がり、縁側を通して宴席をのぞ  
き込んでいた。

「ドイツの音楽は、すごいぞ」と福山は彼の見聞を紹介した。

「ご存知、リヒャルト・ヴァグネルという作曲家の『タンホイ  
ザ』なんぞは、音楽には疎い吾輩でも、序曲を聴いただけで大  
感激したものだ」

「私くしも、一度だけですが、音楽学校で聴いたことがござい  
ますわ」と森先生が続けた。

康次郎は、音楽大学の楽堂で聴いた「歌劇『タンホイザー』  
序曲」を思い出していた。

「あんな大作曲家が作る歌劇を演奏するオーケストラがドイツ  
にはいくつもあって、それらのどれもこれも水準が高い。そん  
な環境で音楽を学ぶってことは、今の日本じゃ、君じゃなきや  
できないことだぞ、高塚」

康次郎は、そんな話を聞くと気持ちが見知らぬドイツへ飛んで  
ゆく気がした。

「先生、ドイツの女は別嬪さんが多いんでございませよ」とは、  
マツ。

「おっと、僕は女に関心がなかったんで、よう覚えとらん」

「まあ、嘘ばっかり」

「あっはっは、別嬪がうじゃうじゃいるぞ。だがな、背がかいのが玉に瑕。日本人には、マツ殿や森先生のようにこぢんまりしたのがいい」

「そうよね。じゃ、康ちゃんがドイツ女を連れて帰ってくることはないか。とすると、うちのタケ子が康ちゃんを好きなようだから、帰ってきてまだ好きでいたら貰ってくれるわね」

「マツ姉さん、冗談言わないでくださいよ。俺は、まだそんなこと考える歳じゃないんだから」

森先生が、驚いたように、

「あら、お宅のタケ子さん、そんなお歳になられたんですね。こちらも年取るはずね」

「帰ってきたら康ちゃんも二十三か四、タケ子も十八でしょ。もうぎりぎりよ」

「ところで、俺の出した宿題はどうなった？答えは出たか」と充男が切り込んだ。

「充男の宿題は、むずかしい。ドイツに持って行くしかなさそうだ」

「ドイツに行く前にやらなきゃダメだって俺は言ってるんだ。お前の作曲した歌には、往々にして四季の雰囲気我々がどう感じ取っているか、それを詩に即して曲に写し取ろうとする努力がありありと見える。しかし、俺に言わせれば、日本の音楽の伝統には、それがもっともっと濃密に豊かな内容で引き継がれていると思う。民謡などにそれが見える。それがそもそも何かということを集大成するには、お前のような才能が必要な

だ。その序論で良い。それをやってから行くことが必要なんじゃないか」

「うーん、そうかなあ」

「やれやれ、無視されかかってらあ」

「また、むずかしい話をして。あら、お月様もあんなに登っちゃったわよ。私、帰らないと旦那様に叱られちゃう」

「あらあらほんと。力車、まだあるかしら」

「大丈夫、僕も力車じゃ」

「あら、よかった。高塚君、お身体にはくれぐれも気をつけてね。それが第一。むずかしい話はその次よ」

「はい、先生、乾杯の音頭をお願いします」とマツが杯を福山先生に手渡した。

「じゃあ、名残は尽きねどこの辺でお開きとするか。高塚康次郎君の壮途を祝い皆様の健康とご多幸を祈念して、乾杯」

「ありがとうございます」

一同は、高く登った満月を眺めながら萬世閣を後にした。

「康次郎、酔い覚ましに城山に登っていかないか」

「おう、そうするか」

ふたりは、彼らが作ったS尋常小学校の校歌を歌いながら石段を登っていった。いつも彼らがおしゃべりをする一の門前の石垣に腰を下ろした。

「日本の音楽界も脱亜入欧は卒業したと思ったんだが、そうでもないらしいな。日本古来の楽想と形式による交響曲なんてのは、まだまだ望むべくもないな」



「依然として西洋指向が強いのは間違いない。しかし、お前の理論に沿って考えてみたんだがな、またひとつ面白いことを発見したんだ。日清戦争以後、随分軍歌が作られただろう。その多くが、ヨナ抜き長音階なんだ。ところが、人気がある歌はヨナ抜き短音階や俗謡なんだ。つまり、日本人は、結局は伝統的な音階が生理的にあっているってことなんだ」

「生理的、うん、そうだろう。お前がたとえドイツに行ったとしても、せめてそのことは忘れないでいてくれ」

「そうだな、俺たちの絆の証しみたいなものだからな、この宿題は」

そして翌年の四月六日、高塚康次郎は横浜港からドイツに旅立っていった。しかし、一年半ほど経った冬、北国ドイツの環境は彼の健康をむしばみ、あつという間に帰らぬ人となった。彼の身体は、日本にいる間にすでに病魔に冒されはじめていたのであった。充男が後になって思い起こすことであったが、時々、康次郎は変な時に咳をしたり寒がったりしていたのであった。なぜ、それに気がつかなかったのだろう、と思っても今や何の甲斐もなかった。

充男は、これで日本の音楽はますます西洋指向を強め、あるべき方向へ進むのが百年遅れるのではないか、彼はそれをただすことができたはずの百年にひとりの天才であった、とその死を惜しむのであった。

衆の歌、野の歌として「梁塵秘抄」が発掘され日本人の眼前に現れたのは高塚康次郎の死から八年後のことであった。梁塵秘抄の発掘が、詩人や歌人に与えた影響は計り知れないものがあり、北原白秋などは、さっそくその影響を色濃くたたえた詩作を発表したりしたものである。しかし、そこから当時の曲想を成功裏に紡ぎ出す音楽家はほとんど現れなかった。充男は、康次郎のことをおもいだすにつけ、「梁塵秘抄」を康次郎が読んだなら、七五〇年前に謡われたこれらの歌を「思い出す」ことができたかも知れない、と呟くのだった。